科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（基盤研究（Ｓ））中間評価

課題番号	20H05630	研究期間	令和２(2020)年度 ～令和６(2024)年度
研究課題名	非流暢な発話パターンに関する学際的・実証的研究	研究代表者 （所属・職） （令和４年３月現在）	定延　利之 （京都大学・文学研究科・教授）

【令和４(2022)年度　中間評価結果】

評価		評価基準
	A+	想定を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A－	概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、 一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

（研究の概要）

本研究は、コミュニケーションの中で容認されやすい日本語母語話者の非流暢性と、容認されにくい非流暢性、すなわち日本語学習者や言語障害者の非流暢性とを対照することによって、発話の非流暢性の本質を明らかにしようとするものである。言語学、会話分析、第二言語教育、言語障害といった異なる研究分野にまたがるこの問題を、言語学（記述言語学・コーパス言語学）、会話分析、第二言語教育、音声科学、医学の専門家によって学際的かつ実証的に解明しようとする極めて独創的かつ創造的な研究である。

（意見等）

従来の「理想化」された言いよどみのない言語活動ではなく、現実に産出される言語に見られる非流暢性に注目し、よりリアルな言語の姿に学際的に取り組もうとする意欲的な研究である。研究の問題設定も非常に明確であり、社会的ニーズも大きく、一見すると秩序に欠けるように捉えられる言語活動から、非流暢性がもつ独自の秩序や機能を明らかにしつつある点は大変興味深い。この研究成果は音声合成システムや日本語教科書を作成する上で、大いに役立つと判断される。また、新型コロナウイルス感染症の影響でデータ収集の方法も修正を余儀なくされたが、適切に対応し、実現可能な計画を立てていることも高く評価できる。

一方で、言語障害の非流暢性については、器質的なものも含めて広範な言語障害をこの研究メンバーだけでカバーできるのかという点は疑問が残る。特に吃音は、社会や教育現場等との関係で非流暢性について最も重要な問題を提起していると考えられるが、そこが十分に扱われていないように見受けられる。また、言語学と会話分析のチームの連携に比べて、日本語教育、言語障害チームとの連携が少し弱いなど、研究組織の若干のばらつきと連携の不足を感じる点があるものの、様々な分野からの分析が

効果的に進められており、連携を密に保ちながら更に研究を進めることによって、卓越的な研究成果が期待できる。